Save The Tropical Forests

Hutan 116

森の通信

2015. 3. 24



ラフレシアは世界一大きな花、たった5日ほどしか咲かない。 2000年1月1日撮影 サバ州で(西岡)

CONTENTS

·People(35)ハビエル・ラミレスさん・・・p3
・総会・報告会の報告・会計報告・・・・・p4~p6
・タンジュンプティン国立公園で・・・・・p7~p11
・スンガイ・プトリ村報告・・・・・・p12~p15
・「こだわる人」、「こだわらない人」、
そして対等であること・・・・・・p16~p17
・オランウータンの生態と保全・・・・p18~p20

・タンジュンハラパン村周辺でのFNPFの	活動
について・・・・・・p21~	p24
ワンワールドフェスティバルの報告・・・・・	p25
・世界の森林ニュースより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p26
·会計より······	p27
・スケジュール・・・・・・・・・裏表紙	



森の通信

2015, 3, 24

116

【サバ州の先住民村から】

インドネシア・マレーシア・ブルネイと3カ国にまたがるボルネオ島。年末年始にマレーシア・サバ州の 先住民ダガット族の村を訪れました。人口 200人くらいで漁業が主な産業であるダガット村では、以前 から JICA や NGO の支援により昔ながらの村の暮らしを活かしたエコツーリズムにも積極的に取り組ん できましたが、近年政府の貧困対策支援により、平地に近代的な家が並んでいる新・ダガット村へ移住 する村人が増えています。全ての村人が新しい村へ移住すると、古い村は政府へと返還されます。そ うなるとツーリズムにとって味わい深い村と共に、周りを囲む豊かな森もアブラヤシのプランテーション 等に開発されてしまう可能性があるのです。部外者としての視点だけで、その是非は問えませんが、 昨年に村人と行ったワークショップでは、ずっと暮らしてきた豊かな森と生きものたちと共に今後も過ご

していきたいという意見が村長をはじめ多くの村人から聞かれました。今回、同行したあるサラリーマンの方は、電気も水道も通ってないシンプルな村での暮らしに、「日本では、いかに必要ないものに囲まれながら生活しているのだろう」と感じたそうです。生態系も暮らしも多様性のある世界が続くことを願っています。(石崎)



【ウータン活動報告】

11/17-20 RSPO開催、JATAN中司氏、COPリヌス氏がBGAとコンタクト

12/4 立命館大学でワークショップ(石崎)

12/10 龍谷大学国際 NGO 論でワークショップ (石崎、近藤)

12/25-1/6 タンジュンプティン調査(近藤)

12/31 RSPO での BGA に対する返答を提出(西岡)

1/25 ウータン総会・ボルネオ現地報告会

2/7-8 ワンワールドフェスティバルにブース出展

People(35) save! the World's Forests

ハビエル・ラミレスさん 活動家・鉱山開発予定地フニン村前村長



私とハビエルさんが出会ったの は2年前、南米エクアドル・インタ グ地方の豊かな森。度々鉱山開 発危機が繰り返されてきたこの地 で、その発端となったのが 90 年 代日本の JCA/三菱マテリアルが 行った試掘でした。彼はこの試掘 地跡まで、ガイドのご夫婦と一緒 に道案内をしてくれましたが、草 木に覆われたすさまじい道中に 「忘れられない旅だ!」と皆で笑 いあったものでした。後に親戚の 方から聞きましたが、ハビエルさ んの父親は当時、この三菱マテリ アルに彼の土地を奪い売り飛ばそ うとした知り合いから発砲され殺 害されたのだそうです。そんな辛 い思いを微塵も感じさせないよう な朗らかな彼は、4人の子供の父

親であり、この土地の自然を愛し(オルタナティブ産業である)珈琲を育て、「インタグコーヒー 生産者組合/AACRIの設立にも関わったそうです。

しかし現在、エクアドル・チリの両国営企業による鉱山開発が強行されようとする中、開発予定地の村長であったハビエルさんは政府の圧力により「反逆罪」で不当逮捕 10 か月間拘留され(有罪判決・控訴予定)、2/10にようやく釈放されました。現地で立ち会えた釈放の日晴れ渡る空の下、政府への抗議の声は響きわたり、群衆に担がれ両手を広げるハビエルさん、そして強く抱き合う家族の姿は清々しく、住民らへの人権侵害といった苦境を跳ね除けてゆく強い意志や希望を感じさせました。彼は言います。「(拘留によって)わたしは人権のために、村の人が踏みにじられないために、わたしたちのすべてを守るために、今まで以上に闘い続ける力を得ることができました。私の弟は同じ罪で告発されています。(中略)/闘いはまだまだ続きます。なぜならいのちは続くから。そしてこの大地は私たちが生きるために必要だから。」(一井) *『エクアドル報告会』4/12 PM3:00~堺町画廊/京都

ウータン・森と生活を考える会 2015 年総会&ボルネオ現地報告会

事務局長 石崎雄一郎

1月25日にケイゾク・エナジーで、ウータンの2015年総会とボルネオ現地報告会を行いました。現地報告会では、はじめに石崎がタンジュンプティンをめぐる2014年の出来事を振り返りました。次に、西岡さんから9~10月の現地調査報告をしてもらいました。C.O.Pと一緒にヘリコプターから空撮した映像では、クマイセバラン~ジュルンブン地区周辺のアブラヤシプランテーションからの大きな火災や伐採の様子が認められました。一方で、ブグル地区でFNPFとウータンが植林を行ってきた場所では、植えた木は順調に育って森となりオランウータンの巣も見つかるなど良い結果が見られました。

近藤美沙子さんからは、タンジュンハラパン村と FNPF (現在のメンバーと役割) の最新報告がありました。バスキによれば、村人の大半はアブラヤシ賛成になっており、農園で働く人も多いということです。しかし、「目の前に毎日働く場所があるのでありがたい」程度の認識だそうです。土地を買う時の登記方法やプラズマ(プランテーション周辺の小農用の土地)の取得プロセスについての話もしてもらいました。

次に、西岡さんが新しく調査した場所の話をしました。トゥンブンコリンは、BGA 関連の NKU 社が土地を買収、C.O.P が反対したもののほとんどが開発され、村人は農園以外の生活手段を失いました。グヌンパルンでは、すでに違法伐採が止まったようですが、現在はアブラヤシと石炭の鉱山開発が BGA の親会社によって行われているようです。スンガイプトゥリは、深い所で 10M 以上の泥炭湿地の森が広がり、半日歩くと 30 個以上のオランウータンの巣がありました。しかし、周りはアブラヤシ開発があり、ここにも脅威がせまっています。中村さんが聞き取り調査をした元村長のルスランさんは現在 NGO をやっていて、今後はエコツアーや JICA (REDD プロジェクトを視野にいれている)との協力で守っていくべきではないか、という話でした。

現地報告の後に、ウータンの 2015 年総会が行われました。座談会形式でざっくばらんに意見を出し合い、積極的な議論の場となりました。

まずは藤村さんから 2014 年の会計報告があり、西岡さんから助成金申請の計画についての話がありました。

タンジュンプティンのアブラヤシプランテーション開発問題では、BGA 社に対し、引き続き RSPO を通じて対話を継続することを確認しました。現場レベルでは、FNPFへの支援を継続します。また、これらの問題について、昨年現地を訪問したクリントン元米国大統領の財団やインドネシア政府とモラトリアムを約束しているノルウェー政府、パームオイル流通会社の Wilmar、インドネシア新大統領ジョコウィへ書面を作り伝えていくことになりました。

パーム油の国内キャンペーンとしては、現地で働く人の労働環境や農薬・健康・法律・流通・環境等に配慮しているかを「企業アンケート」で聞いてみて、それらの結果をメディアにプレスリリースすることや、日本国内で変わりそうな企業にアプローチしてみてはどうかとの意見がでました。また、ウータンのメンバー間で共通認識を広げるために、パーム油の学習会を開催することになりました。

西岡さんの報告にあったスンガイプトゥリへの支援については、まずは現地に行って情報収集することが必要だろうという意見が出ました。また、野生生物調査を行なうという提案に対しては、詳しい調査は専門家のものでないと信頼性がないが、現場での全体的な環境破壊の現状を把握する必要はあるだろうという結論となりました。

その他、ワンワールドフェスティバルへの出展や、HP 充実等の意見がでましたが、基本的な考え方としては、一般の人への問題の周知を引き続き重点的に意識していこう、ということになりました。

会が発足して今年で28年となりますが、大きく世の中が変わろうとしているなかで、きびしい状況が続く熱帯林の問題に2015年も精力的に取り組んでいきます。引き続き、ウータンの活動を暖かく見守り、ご支援いただきますようよろしくお願いします。



2014年度決算(2014年1月~12月)

単位:円

収入		支出	
繰越金	1,229,838	会報製作費	214,560
会費	240,000	事務所家賃	144,000
カンパ(切手カンパ含む)	265,351	送料	65,228
物品販売	17,890	他団体への協賛金	35,000
講師派遣謝礼	10,000	講師-通訳謝礼	70,000
講演会参加費	64,500	会場費	35,600
公益信託地球環境日本基金助成金(前年 分)	900,000	交通費	1,356,230
公益信託地球環境日本基金助成金	1,500,000	事務費	48,492
計	4,227,579	海外 NGO 支援(植林支援)	150,000
		海外 NGO 支援(交通費)	31,880
		冊子印刷代	157,680
		ワンワールト・フェスティハ・ルブース代	15,210
		ワンワールドフェスティバルブース代(来年度分)	16,000
		その他	27,920
		公益信託地球環境日本基金助成金(繰越)	423,720
		次年度へ繰越金	1,436,059
		·	

4,227,579

計

3月3日(火)から放送されているNHKのBS世界のドキュメンタリーの「危険な時代に生きる」のシリーズで、第1回「乾く大地」と第2回「森がなくなるとき」では、なんとあのハリソン・フォードが出演して、インドネシアのボルネオ島やスマトラ島の問題がとりあげられていました。ぞうやオランウータンなどの野生動物だけでなく、泥炭湿地の問題やアブラヤシ農園開発の問題もしっかり、とりあげられていました。スマトラ島のテッソ・ニロ国立公園では、国立公園であるにもかかわらず、アブラヤシ農園の開発が止まらず、8万6000haのうち健全な森林は1万8000haしか残っておらず、あとは、燃やされるかアブラヤシ農園になってしまっているかだということです。

番組の中で、ハリソン・フォードはスマトラ島やボルネオ島を訪れ、ヘリコプターで上空を飛んで、実態を確かめ、最後には林業大臣(当時)を問い詰め、ユドヨノ大統領(当時)にも会見します。また、パームオイルを大量に使用しているユニリーバ社の幹部にも会って、パームオイルの流通王手のウィルマー社との取引の問題でも追及しています。番組では、最近になって、テッソ・ニロ国立公園の問題などで、多少の改善の動きがでてきたとしています。他にも、この番組ではシリアの内戦の背景には、この地域の乾燥化があるなど、とても考えさせられる指摘もありました。現地の住民の視点は弱い感じはしますが、とても迫力のある内容で多くの人々に見ていただきたい番組です。再放送の予定は3月31日と4月1日の午後5時~5時50分です。録画もしていますので、ご覧になりたい方は、ご連絡ください。(米澤 kyone@m3.kcn.ne.jp 返事は遅れるかもしれません。)

中カリマンタンから タンジュン・プティン公園で②

~オランウータン棲む地が燃ゆ! BGA 社は HGU 無の無許可伐採~ 西岡良夫

ジュルンブンに船は静かに着く。2014年9月27日。

FNPFのアドウは「PT.BGA 社の関係の労働者が来るかもしれないので、空撮へりを早く飛ばし、我々が見れない状況を確認したい。オランウータンの死骸調査はやはり無理」という。私もパウリヌスも同意し、小型へりを直ぐ飛ばす。後で空撮したビデオや写真を見ると、PT.BLP 社のアブラヤシ農園が続くが、周りの開発権を得ているという PT.BGA 社が HGU(アブラヤシ開発事業権)を含め、全ての開発許可がおりていないのにも拘らず、勝手に森を伐採し、倒した木々の所や周辺の土地から火災が至る所で発生していた。

空撮へリを飛ばし始めて、アドウは誰か来ないかと、先に出来た BLP 社のアブラヤシ農園の周りを偵察 しにゆく。私と COP のメンバー・パウリヌスは PT.BGA 社のでかい 看板を見ていた。

「何て書いてあるの?」と私はパウリヌスに尋ねた。

「PT.BGA(私たち)はオランウータンを保護しているって、、。クレージーだ。」

「看板下を塗りつぶしているが、BOSF(ボルネオ・オランウータン・サバイバル)が書かれて消したの?」 と聞く。アドウが戻ってきて、「そうだ。BOSF は BGA 社から調査を依頼されたが、私たちが BOSF に申し 入れ、同団体は調査をやめた。が、BGA 社は BOSF の名を利用し、オランウータン保護すると宣伝したからだ」と言う。





(左・BGA によるジュルンブン地区の伐採/中と右・同地区で火災/下・BLP 社の農園横に BGA が予定)9/27



9/27

アドウは見廻ってきて、BGA 社が開発をしやすくするために、誰かが至る所に火をつけていると。とんでもない行為と判った。開発許可が全ておりていないのに、勝手に伐採して火をつける。無法すぎる!ツンブン・コリンの森を壊したケースと全く同じ手法。Crazyだ。また国立公園に火災が飛び火する可能性が高い。

明日は、クマイ・セビランでの泥炭湿地調査と開発状況の確認だ。FNPFのメンバーも久しぶりに行くから、わくわくしている。9月28日は、ジュルンブン手前の調査と、泥炭湿地調査に目的を絞る。ゼンジ、中司チームがコタワリンギン・ラマに行ったから、私とパウリヌスは予定を変更して、同地へ行かないと決めた。

「日曜の午前のクマイ・セビランの調査は無理だ。ラマダンが始まる午後 4 時前なら問題ない。 3 時に出発。調査チームは Mr.西岡、パウリヌス、アドウ、FNPF の1名、JATAN の中司、と私だ。 1 つの船で行くからこれ以上は無理。 ゼンジは残れ」とバスキが明日のメンバーを決める。

スピードボートをゆっくりと走らす。クマイ・セビランには既に3箇所のアブラヤシ開発用の運河が出来 て、その1つからこっそり上陸する。クマイ・セビランの村はほとんど全員がアブラヤシ開発に賛成だから。 見つかると、クマイ・セビランの人たちが調査すらも問題にする可能性があり、矢面にバスキたち FNPF が立つからだ。

あちこちの土地で樹木をなぎ倒している。アブラヤシ開発にするためにショベルカーも導入している。まだ開発許可が全て揃っていないのに。HGU無しで森を切り、大半が整地し始めて、大地を燃やしていた。アブラヤシ開発を容易くするためと、肥料になる灰を作るために燃やす。至る所で燃えている。

「早く空撮しよう、パウリヌス!」とバスキが言う。パウリヌスは空撮機材を直ぐ取り出したが、私が「待て。雨が降るかも知れない。雨雲が全て去る5分後がベストだ」と、空の雲の流れを見ながら伝えた。

待つ。空撮用へリに大きなビニールシートを覆う。パラパラと小粒の雨が落ちてくる。雨雲はゆっくりと南へ流れる。2-3分で雨は止んだ。再度、空を確認し、バスキは「空撮 Go!」と言う。

空撮へりはゆっくりクマイ・セビランの空に舞い上がる。まだ少し黒い雲があるが、空はきれて青空が覗く。 東西南北にへりを飛ばす。運河の土手から飛ばした小型へりは無事に戻る。成功だ。2回目の空撮開始。 後で見ると、クマイ・セビランのあちこちで、アブラヤシ開発のために大地が燃えていた。伐採も酷い。ま だ開発許可がおりていないのに、むごい破壊だった。私はバスキに尋ねた。



写真(上・クマイ・セビランの BGA アブラヤシ開発の伐採・誰かの火付けと対岸の国立公園内の飛び火の火災)

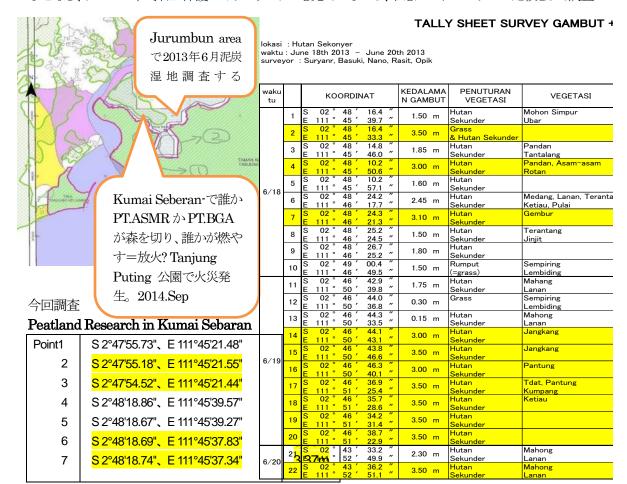
(下左・クマイ・セビランの BGA による HGU 無しの伐採/中・パーム開発の火付け/右・泥炭湿地深さ計測)







へりの空撮を終え、今度は運河近辺で泥炭湿地の計測だ。3m以上の深さなら、新規の森林開発・泥炭湿地開発は停止しなければならない。農業省法令でも3m以上のアブラヤシ開発は開発不能とされている。 運河の第1地点の泥炭湿地の計測は3.28m、第2地点が3.57m、第3地点が2.27m。2つ目の運河での深さは第1地点で3.37m、第2地点で3.05m、第3地点で2.20m、第4地点で2.22mと、7箇所計測のうち4箇所が3m以上となった。まして6ヵ月以上も雨がなかった乾季であり、雨季なら全て3mが大半ではなかろうか。明らかに農業省法令違反で、モラトリアムに反する結果でないのか。開発はNoなのだ。クマイ・セビランの泥炭地計測を終え、今度はハラパン村の対岸近くオランウータン餌場付近の計測だ。なぜなら、JATAN中司君が保護のオランウータンも見ていないし、私もクマイ・セビランの比較として調査



しようと言ったから。測ると深さは、2ヶ所とも 0.45m だった。

「ここはヒース林で、腐葉土層が 30cm から 40cm で、その下が砂礫層となっている。泥炭地でない。根もあちこちに張っているから正確な計測は困難だ。3m の深さはない」とバスキが言う。

ハドランの家に戻り、調査に行けなかったゼンジ、理恵さんたちに報告するバスキ。みんなニッコリだ。 素晴らしい調査結果を得たからだ。アブラヤシ開発が進むと、テングザルやオランウータンの生息も随分 困難になるだろう。無許可で伐採・火付けして、国立公園内に飛び火した点も間違いない。

私とパウリヌスは29日の午前にクマイへ戻るから、その際にオランウータンの巣のカウント作業だ。これは今日、アドウがたまたまオランウータンの巣を運河近くで見つけたから、咄嗟にひらめいた私の考えだ。

結果から言えば、16箇所で見つけたオランウータンの巣は20個あり、大半が3・4ヶ月前に作ったものだが、まだ緑色した巣もあり、パウリヌスは3・4日前に作って、今もこの付近に生息していると言う。アドウは、「パウリヌスの言うように、大半のオランウータンはクマイ・セビランの森から逃げ、このままでは生息できなくなるだろう。同意見だ。私はオランウータンが全て逃げて生き延びることを祈る。やめてくれこの開発」と。

30日早朝4時起きで、クマイ町から対岸のトロク・プライ村へ行く。WALHIのゼンジは起きれず残す。波の静かなうちに行かねばならないからだ。早朝なら問題なしだから。

無許可に開発された運河の途中から上陸する。空撮する。上手く撮影が出来た。酷い風景を後で確認。 泥炭湿地の深さを計測する調査は、賛成派が全員の村人の船が横行するから、中止せざるを得ない。太陽 が昇ってきたから、皆動き出したのだ。しかし見るからのここの泥炭湿地も深そうだった。残念だが中止だ。

「帰ろう」とバスキ。調査の9割は成功したから。大きなクマイ川を行く。皆、微笑む。素晴らしい朝だ。

FNPFの事務所で急いでデータを確認して、私たちは次の調査で、ケタパン空港へ向かった。 やはりだった。ジャカルタ空港を去る時に、バスキに電話した。

「3 日前からジュルンブンの各地で火災が拡大し、私たちは鎮火作業をした。鎮火させたら今度は、パダン・スンビランが飛び火で火災だ。今、アドウチームが鎮火作業にかかっている。私はラマンドウでも火災ということで、今同地で鎮火作業をしている。アブラヤシ開発が拡がって、雨が降らなければ各地が燃える。森もオランウータンも多くの生物が死滅する。許可もなく無法の許せない行為だ」というバスキだった。

JATAN の川上さん、中司君、そして急遽パウリヌス君も 11 月 17 日からの RSPO 会議に向かう。 <u>BGA 社は、当初「伐採権を全て得た。だから 4000ha 分を伐採した。調査は既にした」と言っていた</u>。 再度パウリヌス君らが<u>詰めると「HGU(アブラヤシ開発事業認可)を取得していない」と判明</u>。 火災について「我々はしてない、知らない。 コミュニティがしたことだ。 <u>我々は管理不足だった。 火災を止めるよう努力</u>する」と言う。

11月18日、FNPFらの努力で、火災はやっと全て止まったと。だが、FNPFは「ジュルンブン等で泥炭湿地の計測をコンサル企業がしたか確認できない。私たちだけだ」と。BGA社は何をしたのか?

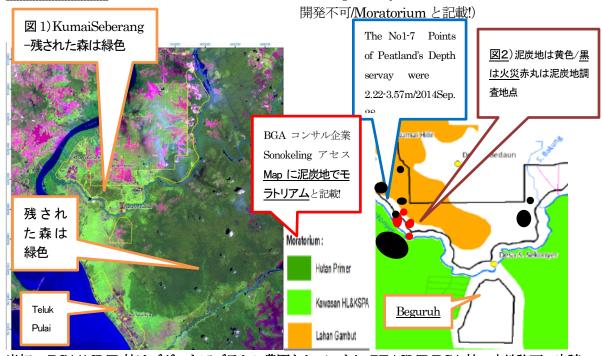






(2013 年トロク・プライの PT.BGA 社の無許可の開発 photo・FNPF/右・トルク・プライの朝 by Nishioka)

2013 年 4 月 BGA のコンサル企業 Sonokeling 調査マップでは Kumai Seberang—Harapan 村の間で 森は残されていた!(右図・泥炭地は黄色で KumaiSeberang-Sekonyer まで 7-8 割占め、3m 以上は



当初の BGA/ASMR 社はブグルもアブラヤシ農園としていた!=PT.ASMR/BGA 社の立地許可の申請

- *ASMR社は、AMDALからの環境アセスを認められたのが2013年10月、IUPの承認を受けたのは2013年 11月28日。IUP(アブラヤシ事業権許可)より先に違法な伐採・開発をした。地区首長からASMR社に与え られた立地許可(Izin Lokasi)の中の条項(Point8ketentuan)で、「企業は当局から土地に対する権利を 取得するまでは土地を開発してはならないと明記されている。コンサルの資料でKumaiSeberangの6割の 土地で2013年当初には森林であったから違法だ。加えて利用権(HGU)を取得する前に損害賠償が支払 われている農園をアブラヤシ農園に転換してはならない事が義務付けられている。
- *またKumai Seberang-ハラパン村までの8割近くがコンサル企業の地図報告の泥炭地(上右図)で、農業 省令やモラトリアムに反すると記載。アセス企業Sonokelingは、既に泥炭地でMoratoriumと記載しており、 BGAは自ら雇ったコンサル結果を見落とし開発、違法だ。

※ブグル、パダン・スンビラン、ジュルンブン開発停止の公言と実行を!!

*2013年11月28日 (木曜日- [PT.ASMRは、オランウータンの保全のための中央カリマンタン州政府に 809haのタンジュン・プテインの地区に位置する土地(ブグル)を寄付と表明。「ブグル、パダン・スンビラ ンもしない」と私達に回答し、「ジュルンブンの開発も泥炭地である」と認めた。これらの開発は違法性が 高く、これ以上の開発を、ASMR、BGA社は停止すべきだ。

最終的に世界に「タンジュン・プテイン公園の周辺で開発しない」と宣言し、行為を停止することだ。

西カリマンタンから 膨大な Co2 眠る Sg.プトリ泥炭湿地保全を

=スンガイ・プトリ泥炭湿地林のオランウータン生息個体数は、面積当り世界ーか=

西岡良夫

2014年8月、ネットで見つけた Data を読んでいなかった。FAUNA& FLORA International (以下 FFI) が詳細に調査 (『HIGH CONSERVATION VALUE FORESTS in KETAPANG LANDSCAPE』) したものだ。西カリマンタンのケタパン地区のグヌン・パルン国立公園の南にあるスンガイ・プトリ泥炭湿地等の事だ。詳しく読むと、1980-90 年に地域の人々がこの森の一部を伐採し、木材はケタパン等へ運び出された。

スンガイ・プトリ泥炭湿地林は、FFI 資料で 525 頭のオランウータンが住み、テングザル、マカウも生息し、 鳥類も 75 種にのぼり、希少種ラミンなどが多く残る 53000ha の森だ。森の 8 割が以前より切られず残るが、 アブラヤシ開発へ 85%が転換する恐れがあると記載していた。Google Map でスンガイ・プトリを見ると、真っ 平らな森林で、アブラヤシ開発が進むと、CO2 は最低 400 万トンの貯留があるから大変な排出となる。

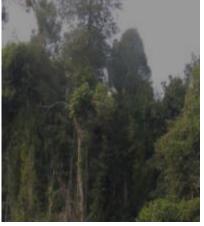
私は、オランウータン保護センターのパウリヌス君にデータを見せ、「グヌン・パルン国立公園の調査も必要だが、森林の大半が残されているスンガイ・プトリ泥炭湿地を破壊されたら大変だ。行くか?」と伝える。

パウリヌス君は「すごい興味深い地域。オランウータンはそんなにいるか確認のために行きたい」と。決定。 彼がいるから、オランウータンの巣なども容易に見つけられるし、村人とのインドネシア語を英語にしてもらえるから、彼のフライトをも予約した。2014年9月30日、パンカランブン空港からケタパンへと向かう。

10月1日、グヌン・パルン公園調査の前にスンガイ・プトリ村に何気なくチャーター車を止め、村人に聞く。「スンガイ・プトリを良く知る人物をしらないか?」とパウリヌス君が尋ねたら、近くの家を紹介してくれた。家から40歳位の男がやってきて、握手し互いに名をなのる。

「Ruslan(ルスラン)。昔は村長だが、今は Forum HUTAN Desa KETAPANG(地域 NGO)責任者だ。」「明日、ここのスンガイ・プトリの森を誰か案内してくれないか。重要な地域と思う」と、私たちは伝えた。彼は承諾し「森を良く知るガイドは、あなた方を連れてきた人だ。OK?」と双方に聞く。決まり。明日早朝にスンガイ・プトリ泥炭湿地を調査できる。私は「大変貴重な森であるから必ず行きます」とルスラン氏に伝えた。





(スンガイ・プトリ泥炭湿地林の入口で、森の入口から 1km の地点で第1のオランウータンの巣発見!) 10月2日、予定より30分早くバイクでルスラン氏宅に着く。そこに昨日のルスラン宅に案内してくれた村人がバイクですぐやって来た。簡単な打合せのあと、2台のバイクで森へ向かう。15分ほど全く真っ平らな草原を行く。昔に一部伐採した跡が伺われた。森の外れにバイクを置き、森へ行く。

壊れそうな木馬道を案内人が先に、そしてパウリヌス、私と続く。朝 8 時前の森を小鳥たちがさえずる。案内人は意外と早い足取りだ。パウリヌス君はダヤク民族だから木馬道を気にしない。

「素晴らしい森だ。ケタパンの近くに大きな森林地帯が残っているて、信じ難い。それにしても木々が太陽にあたって美しいなあ」とパウリヌス。私も同感と言う。どんどん案内人は森を行くが、パウリヌス君がオランウータンの巣を発見する。森の入口から約1kmの地点。驚きだ。私は余りの事で聴く。「オランウータンは脅威の人間、伐採者やアブラヤシ開発者がいないから、こんな近くで巣を造るのか?」「そうだろう。私もこんな森の入口で見たのは初めて。たぶん人間も来ないからだろう」と彼が答える。今度は案内人がオランウータンの巣を見つけた。また3分泥炭湿地を歩いて、2つの巣を発見。

「あれは6ヶ月前に住んでいたのだろう。巣の色が黒褐色だから。片方の大きな巣は、母と赤ちゃんオランウータンの巣だ」とパウリヌス君が説明する。案内人は良く知らないから聞き入っている。

案内人は足早になるが、次々とパウリヌス君がオランウータンの巣を見つけるので、速度は今度ゆっくりになる。私は案内人がゆっくり歩くので、ビデオ撮影しながら歩く。木馬道の下を見ながら歩いた。

「痛てっ…!」何かにぶち当たった。私の頭に潅木がぶつかったのだ。また歩き出すが、今度は木馬道を外して尻もちをつく。「大丈夫か」とパウリヌスが言う。傍にはラミンの小径木があった。

「どうもこの周辺の森は以前から潅木で、巨大な樹がなかったみたいだ。ラミンも細く高さが低い。 売りに出しても高価にならず、たぶん木馬道を利用した伐採でも木が小さいもので、抜き木したのだろ う。伐採後約 30 年たったら、小径木の多い森だから元の森に近くなったのだろう。まだ奥が深そうな 泥炭湿地林で、大半の森が残っていそうだ」と今度は私が説明した。FFI 資料とおりかと思う。







(様々なオランウータンの巣/右・4m 強の高さの巣) Research: Data: 2 Oct. 2014 Sg. Putri Peatland forest 次々とパウリヌス君がオランウータンの巣を見つける。

「あそこにもある。向こうにも見えるよ。こんなの初めてだ。この森にはたぶん多くのオランウータンが生息しているのだろう。もう少し歩いてみないと判らないが、予測からして近辺だけで 20 頭以上は生息しているだろう」とパウリヌス君が言う。5分歩いて、緑色の若い葉の巣を見つける。

「10月初めは乾季の最後で、この近くに果実も少ないから、ルスラン氏の言うようにオランウータンの多くは川沿いの森に移動しているかもしれない。彼らは果実がないと、イチジク類や多種の葉を食べる。それも少ないと 1km以上移動して、次の所を探すことが多い。この森は西岡さんが言うように低木層みたいで、データでレオパード・キャットが居ないようだから、木と木を渡らずに地面を歩くかも。」「やっぱりだ、あの板根にオランウータンの足跡があるよ」とパウリヌス君。

*守れ!スンガイ・プトリ泥炭湿地、森が残り、面積当りオランウータン個体数は世界一か2位!

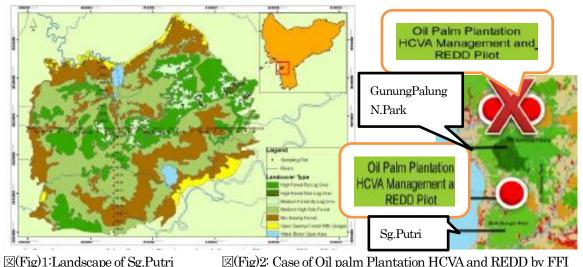
「この森は大半が残されている。オランウータンはぐるぐる森を回れば、どこに食べ物があるか判るだろう。しかしだ、オスが好みのメスを見つけると行き先変えて交尾に行く。普通オスは交尾したら、違う森へ移動する。 赤ちゃんが出来るようならバイバイや」とパウリヌス君。私は「家族で住むギボンとえらい違い」と2人で笑う。 「また巣があった。もう 15 個目だ」とデカイ声でパウリヌス君が言う。私は「あまりデカイ声なら、オランウータンも他の動物も逃げるよ」と伝えたら、また巣が見つかった。

「これは4-5ヶ月前に作られた巣か?」と尋ねる。案内人は、今度径になっていない所を山刀(パラン)で切って通る。足元ばかり見ていた私は、木と2回目の衝突。痛いとはいえないが、少ししゃがみ込む。

2分歩いて巣を発見。3分歩いて巣が2つあった。少し歩きまた巣を発見。石に着いたウンコも発見した。 木漏れ日のさす森を3分行って、開かれた所に巣を見つける。ここで巣の高さを計測する。4m強だ。

「オランウータンはこの辺りでかなり生息している。驚きだね。しかし、強大なアブラヤシ企業なら、この地は容易く伐採するだろう。先住民や地域住民が開発に反対していても、情報が伝わらなかったり、NGO がフィールド調査しなかったら、溢れんばかりの熱帯林はきれいに切り倒されてしまう。アブラヤシ企業なら、急速に開発するため、平らにするため、灰として肥料を作るために、火を入れて辺りを燃やすことが大半だ。Tumbung Koling の森もそうだ。そうなると、動物や植物はお陀仏だ。多くの森が燃え、大火災やCO2 増加の原因にもなるよ」とパウリヌス君。半日で30個の巣を確認した。

「タンジュン・プテインの時のように NGO がもっと協同して、調査や行動が必要だろう。強力な NGO が主導しての行動だけではダメだ。お互いが知恵を出し合い、ジョイント行動が成功する」と私。



1989年から99年に森林消失があるも、他地域と比較して僅か。その後今まで大きな破壊がされていない。 現地調査後に、面積辺りのオランウータン個体数の比較をする。スンガイ・プトリ泥炭林は森が約8割残り**オ** ランウータンは約500 頭生息。他区はセバンガウ公園が5000・5500 頭(578,000ha)、Mawas 公園が3000 頭(501,000ha)、タンジュン・プテイン公園が1500・2000 頭(415,000ha)、Sabah ダヌン・ヴァレー保護区 425・500 頭(44000ha)で、スンガイ・プトリかダヌン・ヴァレーが世界一の面積当たりの個体数だ。残念ながら 今回オランウータンを見れなかったが、ほんの少しの調査でも巣の調査からして、かなりのオランウータンが生息していることが判った。ダヌン・ヴァレー保護区にSabahのメンバーと行って、3日調査したが、2頭のオ

*平均 7m の泥炭湿地に 400 万トンの CO2 がある森を壊せば、膨大な排出量が・・!

ランウータンを現認したが、このように多数の巣はみつけられなかった。ここはすごい個体数だろう。

今度は泥炭湿地の調査だ。初めは交互に地面に棒を突き刺し、計測する。ドロドロになった硬い木の棒を引き抜きメジャーで測る。泥が服に飛び散るが、第2地点に移動して案内人がし始めたので、私は

「パウリヌス、君は Young man。 私はオールド・マンだ。 今回は私が Boss。 頑張れ、パウリヌス」と告げる。 「エエーっ。 それはないよ」と言いながら、 硬木を地面に突き刺す。 ズブ・、 ズブ ぶー。 棒が半分以上地面に突

オランウータンの足跡









き刺さる。第1地点は 2.5m だったが、第2地点は 4.2m。パウリヌス君の手はドロドロ。次も私かとパウリヌスが自身を指差す。

「You must try all! あんたが全てやるんや」と繰り返す。次の地点へ移動してまた計測。5m。

「何箇所するの」と泥が顔に着いたパウリヌス君が尋ねる。「最低 6 ポイントかなあ。You are young」と私。 第4地点で10mとなり、硬い棒が曲がり取り替える。第6地点では10m以上となり、まだ棒がどんどん地面に入って、棒の長さ不足で10m以上の計測が出来ない。合計6地点を計測した結果は深さ2.5-10mで、平均6.04m。 驚き。 村人は「もっとスンガイ・プトリ中央部の泥炭湿地は深い」という。

FFI データでは平均 7m の泥炭湿地の深さと記載され、僅かの調査もほぼ信用できそうだ。FFI 等の指摘で、泥炭地の深く沈んでいない表層で 400 万トンの炭素貯留であり、研究者のデータで 4億 4623 万トンのバイオマスがあり、森林破壊されると大変な CO2 を排出することになる。森林破壊と劣化による世界の温暖化効果ガスは全体の 12-20%を占め、現在 13 万 ha の泥炭湿地から 30億トンの炭素を排出する。カリマンタンとスマトラ島からが大半で 85%を占めると言う(Wetlands International Indonesia Program/2007)。ここには大量のバイオマスを含むという。案内人は言う「アブラヤシ開発される可能性がある。」「2016 年か 2017 年にこの森が開発されるかもしれない」と。何故だ!

以前から3m以上の泥炭湿地でのアブラヤシ開発は、1990年のインドネシア農業省令で停止しなければならない。地方政府は平均7mの深さのこの泥炭湿地のアブラヤシ開発許可を下ろしているとはどうゆうことか。

緑豊かな広大な森が残り、絶滅危惧種が多く住む森。大半が深い泥炭湿地と考えられるが、何故開発 okか?このアブラヤシ開発等がされれば、オランウータンや多くの生物は既に周りが開発されているため逃げ場を失い、捕獲され密売されるだろう。ルスラン氏にもっと話を聴こうと、遅い昼飯を食べ戻る。

「最近、オランウータンをアブラヤシの労働者が殺していると。何頭かは判らない。写真もデータもなく、アブラヤシ開発反対のキャンペーンは進んでいない.FFI など国際的 NGO が来て調べだした」とルスラン氏。

「多くの NGO が共同調査を 2015 年に実施予定して、泥炭湿地の深さをもっと各所で調べる。オランウータンやテングザルの個体数につき住んでいる地区を詳細に調べ、データを作成しまとめて訴える。是非ウータンも協力してくれないか」とパウリヌス君が言う。既にオランウータン保護センター代表のハルデイ氏は「是非とも守らねばならない森」と思うと、電話で連絡したそうだ。

「HUTAN Groupメンバーの皆は、このスンガイ・プトリ泥炭湿地を全く知らないし、まずは内部で話したい。 うまくゆけばインドネシア語に堪能な仲間が来れるかもしれないので、まず相談。私たちの行動はその後だ。 この泥炭湿地林保全に関しては、Wetlands InterやWALHI、Telapak、WWF等が協力してくれ、調査が 進むなら開発にStopをかけれるかもしれない。ジャカルタ、ボゴールで多くのNGOsと相談する。日本に戻ってからだがJICAなどにも伝える」と、私はパウリヌス君、ルスラン氏に告げた。

どこまで取り組めるかは判らないが、絶対に守らねばならない森だ。2016 年からで急を要する。インドネシア政府は、2050 年に CO2 を半減させる目標を持つなら、大量に CO2 を大量に排出する開発は一度許可しても取消すぐらいしないと不可能だ。環境アセスがまともにされない場合、認可権を取消す必要があると思う。

初めてタンジュン・ハラパン村を訪れてから漠然と抱いていた違和感、その正体が少しだけ見えてきたような気がする―2014年の年末からカリマンタン入りをし、村で静かな年越しを過ごしながら、そんなことを考えていました。

「インドネシア語が喋れるなら、開発に賛成している村人の意見をぜひ聞いてきてほしい。」カリマンタンに行く度にそういった期待を背負い村に入りながら、正直、私には「賛成派」がどういった人たちなのか見えてきませんでした。もちろん、アブラヤシ農園で働いている人はいるし、家の前にアブラヤシを植えている人もいます。でも、そのことでいざこざは起きていないようだったし、逆に、植林グループに入っているおじちゃん・おばちゃんたちが、必死に開発に反対しているようにも見えませんでした。「仕事は色々だけと、みんな同じ、のんびり暮らしている」といった感じ。もちろん、村を数日訪れただけで全てが分かるとは思っていませんし、しょせん外部者の私に、村の人が何を考えているかを知るなんてことはできないのかもしれません。ただ、通い始めて4回目にして、やっと等身大の村の人が見え始めたような気がします。

■「こだわる人」ハドランさんの話

50代前半のハドランさんは、FNPFのスタッフの中でも古株。スタッフとして働く以外にも、木の彫刻をつくってお土産として売っています。最初に木をつかって作ったのは、スプーンだったそう。トレッキングガイドをした時にスプーンが足りなかったため、ガラスの破片で彫ったウリンのスプーンでまかなったとか。木材以外にもココナッツの殻で食器を作ったこともあるそうですが、材料費を計算すると利益はゼロかマイナス。また、お土産はいつ売れるか分からないため、長い間外に置いていても劣化しにくいものを選ぶと、今のオランウータンの彫刻がベストなんだと教えてくれました。外国人の私からすると、「もっとこんなお土産品があれば売れるかもしれないのに」と思うこともありますが、クリエイティブなハドランさんは試行錯誤を重ねた末、一番現実的な道を選んで実行しているんだと知りました。

私は、彼の姿に自分の弟を重ね合わせます。絵を描いたりデザインや音楽を勉強したりと、芸術に情熱を見つけた弟は、中学生の頃から学校の勉強に意義を見出せず、高校には通わずに好きなことを極めようとしています。自分なりの「こだわり」を持って生きている人なのです。



■「こだわらない人(?) | スカディさん

ハドランさんと同じくらいの歳のスカディさんは、数年前にはFNPFが組織した村人グループに入って、植林やトレッキングガイドの仕事をしていましたが、今は主にアブラヤシ農園で働いています。ただ、土木作業など、より手取りの良い仕事があればそちらを優先させるそうです。FNPFと一緒に仕事をしていた頃は、1回の儲けはよかったけど、1年間で仕事のある時期が限られていたので、農園での作業のように定期的に仕事がある方が助かると言っていました。農園での仕事がいつまであるかは知らないけど、これだけ広い土地だから、まだしばらくはあるだろう。自分に仕事がなくなったり高齢で働けなくなる頃には、子ども達が働き始めて自分を養ってくれる一そんな言葉を聞くと、「ボルネオの森を守らないと」と考える外部者には、直感的には「なんと悠長で先のことを考えていないんだ」と思われますが、もし自分がスカディさんだったら、と想像してみると、案外同じような生活をしていたのかもしれません。

彼の生き方はある意味、目の前にある楽な選択肢を選んでいるということではないでしょうか。そして、私には、そんなスカディさんの中に、弟とは対照的な学生生活を過ごした自分自身が見えます。とりあえず、目の前の勉強をこなしていたら、大学に行ってどこかに就職するだろう。就職して、そのうち結婚して、子どもを持って、子どもが独立する頃には退職して一そんな「当たり前」な生活しか見えなかったし、周りからも教えてもらえなかった。私の周りにもそんな風に生きている人はどうやら沢山いるみたいだ・・・。

これを読んでいる方には自明の理かもしれませんが、私が今回やっと強い実感とともに確信したのは、「村の人たちは日本にいる私たちと同じ」ということです。「プランテーションに生活を破壊されていることに気づかずに、それを助長する生活をおくっている賛成派」と「環境を守るために、開発に断固として抵抗する反対派」という、当初の私の思い込みとは違い、あえて違いを挙げるなら、私と弟の例のように、「こだわりが強い人」と「そうじゃない人」であるということくらいでしょう。 「村人と一緒に森を守る、再生する」と言うとき、「森を壊されてかわいそうな村人たちを、搾取者である私たちが罪の意識から(解放されるために)助ける」という図式が以前の私のなかにあったような気がします。そうではなくて、村の人たちと私たち、

いい意味でも悪い意味でも人間同じ、という目線を持つことで、やっと、対等な「協働」のスタートラインに立てるのかな、と思いを巡らす村での年越しでした。



▲火事後に植えられたアブラヤシ苗木と、生えてきた新芽



第3回 オランウータンの進化史

久世濃子(国立科学博物館・人類研究部)

オランウータンの生態と彼らが暮らす熱帯雨林の環境についてお話してきましたが、今回は視点を少し変えて、オランウータンの進化、歴史についてご紹介したいと思います。

オランウータンは大型類人猿の一種で私たちヒトと同じく、「ヒト科」に分類されます。DNAと化石の研究から、1800万年前頃に、オランウータンの祖先とヒト(とチンパンジー、ゴリラ)の祖先はわかれた、と言われています。ちなみにヒトがチンパンジーの祖先とわかれたのは、700万年前と言われています。

オランウータンの祖先は、アフリカを旅発ち、陸続きになっていたユーラシア大陸にわたり、アジアに進出しました。1250~850万年前にインドやパキスタン付近にいたシバピテクスは、かつてはヒトの祖先とも言われましたが、現在では「オランウータンに近い種では?」と言われています。最近、オランウータンの直系祖先だろうと言われているのが、700~900万年前にタイの辺りにいたコラートピテクスです。

現在、オランウータンが生息するボルネオ島とスマトラ島は、海水面が低下した氷期には、マレー半島と陸続きとなって「スンダランド」と呼ばれる陸地になっていました(図 1)。オランウータンは少なくとも 150 万年前にはこのスンダランドへと進出し、ジャワ島まで(その)分布域を広げました。100 万年前には東南アジアのオランウータンの数は、少なくとも 200 万頭に達していたと推定されています(Rijksen & Meijaard, 1999)。しかし氷河期が終わりスンダランドの一部が水没したため、生息数も減少したと考えられています。それでも森林に覆われていた面積をもとに推定すると、1 万年前にはスマトラには 38 万頭、ボルネオには 42 万頭、マレーシア半島に 34 万頭、ジャワ島にも少なくとも 10 万頭のオランウータンが生息していたと考えられます(Rijksen & Meijaard, 1999)。しかし、現在のオランウータンの生息数は多く見積もってもスマトラ島に約 6,500 頭、ボルネオ島に約 54,000 頭、合計約 60,500 頭にすぎません(Wich et al. 2008)。

さてここまでは化石をもとにしたお話でしたが、次は遺伝学(DNA)の成果についてご紹介しましょう。現在はボルネオ島のオランウータン(学名: Pongo pygmaeus)とスマトラ島のオランウータン(Pongo .abelii)は、「別種」とされています。スマトラ・オランウータンの2番染色体に「転座」という突然変異があり、染色体を観察するだけで、種を判別することができます。飼育下で交雑可能ですが、雑種は純血個体に比べて寿命が短い傾向があります。遺伝学的研究だけでなく、形態や行動の面でも両種の違いが報告されているため、現在では飼育下でも交雑は禁止されています。

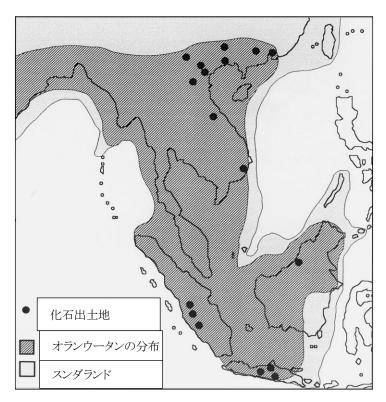


図 1 過去のオランウータンの分布(Rijksen & Meijaard, 1999 を改変)

DNA を分析する集団遺伝学によって、ボルネオ・オランウータンとスマトラ・オランウータンが分岐したのは、寒冷化によって生息地の熱帯雨林が縮小・分断された 17 万年前頃と報告されています(Arora et al)。

特にボルネオ・オランウータンは、地球規模の寒冷化に伴い 13 万年前頃に、激減し、その後、温暖化によって森林が拡大すると、8 万年前までに再び島内全域に分布を広げました。しかし大きな川や高い山(オランウータンは通常、標高 1000m 以下に生息)など地理的な障壁が、移動を妨げた為、各地の個体群はそれぞれの地域で分化していきました。

オランウータンでは、雌は出生地に留まる一方、雄は出生地を離れてかなり遠くまで移動する為に、母系遺伝するミトコンドリア DNA をみると、亜種レベルで個体群を分けることができるのに、父系遺伝する Y 染色体でみると、ボルネオ島内の個体群を分けることはできない、という報告もあります (Nietlisbach et al. 2012)。

これはオランウータン以外の種の保全を考える上でも大事な視点で、<u>遺伝学の研究成果を鵜呑みにせず、その種の生態や繁殖様式を正確に理解していないと、</u>保全すべき最小単位を見誤ってしまう可能性があります。

ちなみに、スマトラ島では 2000 年代になってから、トバ湖の南に生息する個体群が発見され、集団遺伝学の研究から、この個体群はトバ火山の複数回の

噴火によって、トバ湖北部(アチェ、グヌン・ルーサー国立公園)の個体群と長期にわたって分断されてきた可能性が指摘されています(Nater et al. 2015)。

じつは、このスマトラ島の2つの個体群は、ボルネオ島内の個体群より、遺伝的な違いが大きいのですが、個体数があまりにも少ない為に、それぞれを保全の最小単位とするのは難しいのが現実です。またスマトラ島では、2万4千年前に、島内全域で個体数が激減しており、これはヒトの狩猟が原因ではないか、と言われています(Nater et al. 2015)

オランウータンは数百万年にわたる長い進化の歴史の中で、地球規模の気候変動の影響を受けて、個体数や分布域が大きく減少したこともありました。そうした危機を乗り越えてきたオランウータンを、今、絶滅のふちに追いやっているのが、私たちヒトです。しかもそれはここ数十年だけの話ではなく、10万年前にヒトがアジアにやってきた時から、オランウータンの苦難の歴史は始まった、といっても過言ではないかもしれません。



図 2 ボルネオ・オランウータンとスマトラ・オランウータンの違い (久世濃子「オランウータンってどんな『ヒト』?」より転載)

タンジュンハラパン村周辺でのFNPFの活動について

念願かなってボルネオエコツアーに同行

神前進一

タンジュンハラパン村とは

一昨年から参加を希望していたボルネオ エコツアーに念願が叶って同行させていた だいたので、私の関心に沿って、現地での見 聞を中心に記してみたい。

観光船や商船で賑わうクマイの港から観光用ハウスボート(クロトック)に乗り込み、15分ほどでジャワ海に近い河口部を横切り、セコニエール川に入った。ニッパヤシ、少し遡るとパンダナスが両岸に茂る泥炭湿地林をゆっくりと約1時間半かけて目指すタンジュンハラパン村に到着した。



タンジュンハラパン村の船着場

タンジュンハラパン(直訳すると希望の岬) と人々は呼ぶが、タンジュンは岬ではなく河 川の屈曲部によく付けられる地名。この村の 正式名称は中カリマンタン州西コタワリン ギン県クマイ郡スンガイセコニエール村と いう。この村は1977年まではセコニエール 川の左岸にあったが、ユネスコによる生物圏 保護区が設立される際に、その境界内に入る ため、対岸の現在の位置に移転させられた。 移転後、村の世帯数が増加し、1993年には 85世帯、人口423人になり、現在もほぼ同 程度とみられる。 この村の住民はどのような来歴の人々なのだろうか。カリマンタンの内陸部にはダヤクと総称される先住民が国境北側のサラワク・サバにも分布する一方、海岸部はマレー系住民が居住すると言われる。この村にはモスクがあるが、人々の生活を見る限りイスラム色は薄く、ヒジャブをかぶった女性はほとんど見かけず、アザーンも聞こえてこないし1日5回の礼拝も行われている様子はない。しかし、出発前夜の交流会で披露してもらった空手に似た伝統武術シラット、若い女性の踊り、伴奏の民族楽器、伝統衣装を見て、マレー半島東岸で見たものと彼らの伝統文化の同一性、海によるつながりを確認することができた。

FNPF の3つの活動地

この村ではバリ島に本部を置く国内環境 NGO である FNPF は、野生生物保護、生息 地の回復、コミュニティの生活向上、さらに 子どもたちへの環境教育を統合したアプローチで、住民主体の自然保護活動を育てていくことを支援している。 今回の滞在中に FNPF の3つの活動地を訪問することができたので、以下に概要と感想を記したい。

1. プサラット

プサラットは FNPF が 2000 年から植林活動を行ってきた最古の拠点である。国立公園区域拡張までは伝統的な焼畑農業が行なわれていた場所で、ここにあった小さな村の住民はタンジュンハラパンやクマイの町に移住したという。国立公園編入後もウリンの違法伐採が盛んに行なわれ、その結果、森は失われ、ススキに似た雑草インペラータで覆

われた荒廃した土地になっていた。2003年にこの一帯が山火事で焼失後に再植林に取り組み、すでに48haを植林しほとんど完了している。作業小屋にFNPFのスタッフ1名が常駐し、現在は1日6本のペースでの植林、植林地の見回り、苗づくり用の種拾いと育苗を行っているほか、2012年からは月1回のペースで環境教育を実施しクマイの町からも子どもたちが来る。私たちはタンジュンハラパンの小学校の子どもたちと一緒にニャトーとアルーを1本ずつ植林した。伝統薬用植物園も併置され、見学に訪れた外国人観光客の姿も見かけた。山火事にも焼け残り、切り株からも萌芽で再生しているウリンの生命力に感動を覚えた。



火事にも焼け残った木の切り株

2. パダンスンビラン

パダンスンビランは村から下流へ船で 10 分余りの対岸に位置する。セコニエール川の 左岸にあるが、国立公園の特別区域で 1982 年に国が排水路を作り 200 人が 500ha の農 地に入植したという。しかし、1987年、2006 年、2011年の度重なる山火事で現在はイン ペラータの茂る荒地になり、農家も 10戸ほ どに減少した。泥炭湿地と砂地の乾燥地が複 雑に入り組んだ土地条件を持つが、3年前に FNPFは 40ha の荒地に 10種 16000本を植 林した。3年が経過した現時点でブランガラ ンが最も成長が早く、4m 近くに育っていたが、最低 3 ヶ月に一度は必要とされる植林後の草刈りが不十分であったり、動物の食害で枯れたものも見うけられ、植林後の地元住民による絶えざる管理の重要性を実感した。ここでは FNPF が支援してタンジュンハラパン村の住民の苗づくりグループを組織し、育苗と植林活動を行っていたが、アブラヤシプランテーション賛成派が多数派になった2012年に活動を停止した。その後、昨年春に新たな苗づくりグループが 9 名で結成され、苗木生産による収入を補い経済的自立を



パダンスンビランで飼育されている牛

目指し野牛草を飼料とした牛の飼育にも取り組んでいる。苗木の販売代金などはグループの収入となるが、将来のための投資にどれだけ回し、労働量の異なる各メンバーにどのように分配するかなど確立していない問題も多く、リーダーの能力や統率力が問われている。私たちは苗木1本3万ルピア(通常の販売価格は1万ルピアだが貧しい人には無料で、企業には高値で売る)で5本ずつ購入し、泥炭質の湿地での植林を体験した。

3. ジュルンブン

ジュルンブンはタンジュンハラパン村から上流へ船で約 1 時間のセコニエール川右岸にあり, BW 社のアブラヤシプランテーシ

ョンとの間,つまり国立公園外の緩衝帯に位置する。川岸から 1km 余り内陸には 2008年にラミンの森を切り,300m間隔で排水路を掘り 4mの深さの泥炭湿地を乾燥させ,



FNPFのインフォメーションセンター

12000ha にアブラヤシが植えられたプラン テーションが広がる。この会社で働く村人は 5人だけで、クマイの町やジャワ島からの労 働者が多くを占めるというが,新しい会社の プランテーションで働く希望者は多いとい う。川岸から 3.75km までは地元住民に利用 権が認められているため,プランテーション 会社に対しプラズマ(小規模自営農園)とな る権利を求めデモを行ってきたが,会社側は 河岸から 1.5km まで農園開発を行った。 FNPF はこの土地をプランテーション反対 活動の拠点と位置付け、2008年に川岸との 間の土地で FNPN のメンバー13 人が 一人 1h a ずつのリース権を 60 万ルピア (約6千円)で買い(現在は5万円位に上 昇しているとのこと), そこに換金作物のゴ ムやガハル(沈香)が植えられている。FNPN はアブラヤシに代わるアグロフォレストリ 一方式の土地利用を実証し見せる場として, 鶏や牛を飼い, 堆肥や有機肥料を作り, さま ざまな野菜を有機栽培する準備を始めてい る。 訪れた時期が乾季であったせいか、 土づ くりや農業生産が本格化しているようには 見えなかった。野菜とフタバガキ科在来樹の育苗用に給水塔の建設と、子どもたちのための環境教育センターの建設が予定されている。なお、ジュルンブンには 6 軒の家があり、川での漁業を生業としプランテーション会社に魚を売り生計を立てている世帯で、タンジュンハラパンにも家があって行ったり来たりの生活をしている。川沿いのわずかに残された森では、夕暮れ時に多数のオランウータンやテングザルを船から観察することができたが、野生生物の生息地として重要な川沿いの森(国立公園外の右岸部分)が地元住民の管理のもとに残されるための権利確立が急務と考えられる。

Mジャイスさん一家

私が民泊させていただいた M ジャイス さん55歳は、村のリーダーの一人で、現在 RT (隣組) 1の長であり、2012年に活動を 停止したパダンスンビランでの苗づくりグ ループのリーダーでもあった。家族は地元出 身の奥さん,長男とクマイ出身の嫁と孫,中 学生の末娘であるが、奥さんの妹さんが隣接 してこの村一番の雑貨店を開いているため 家の前は村人のたまり場となっており、人の 出入りが多い。この家では長男が 1 年半前 からアブラヤシプランテーションで 7万5 千ルピアの日給で働くようになった。今から 2年前を機に、この家そして村の暮らしぶり は激変した。2台の大型発電機が村にプラン テーション会社から寄贈され、村人は月8 万ルピアの支払いで電気の恩恵を享受でき るようになった。これを機にこの家でもテレ ビを購入し, 夜は家族全員がテレビの前に釘 づけ状態であった。1 年半前, M ジャイス さんを含む 8 人の村人がジャカルタへの 1 泊の観光旅行に費用全てプランテーション 会社持ちで招待された。この旅の衝撃はとて も大きかったようで、彼をはじめとする村の リーダーが雪崩を打ったようにプランテー ション開発賛成派へと変節することとなっ た。

セコニエール川の水質

訪問した小学校の教室では、川の汚れはな ぜ起きるのか、なぜ問題なのか、どうすれば 解決できるかを子どもたちに考えさせる授 業が行なわれていた(この若い女性の先生は



タンジュンハラパン村の小学校

同じ敷地内の中学も含め 3 つのクラ スを同じ時間に掛け持ちで教えていたこと には驚いたが)。セコニエール川は 20 年前 までは泥炭地特有の黒っぽい透明な水質で 人々は水浴から調理までこの水の恩恵を受 けて暮らしてきたという。キャンプリーキー 付近のセコニエールカナン川は今なおかつ ての水質を保っているが、合流点では本流の 茶色く濁った水とのコントラストが際立っ ていた。1990年に始まった上流で砂金の採 掘(2003年に禁止されたがその後も小規模 に行なわれ汚濁だけでなく水銀汚染が懸念 されている) や違法伐採、さらにはアブラヤ シプランテーションでの農薬使用により,汚 濁だけでなく中程度の重金属汚染が報告さ れている。村人も魚の数が減ったというが、 汚染の進んだ川の水で水浴や洗濯をし,食材 や食器を洗う世帯が大半を占める。村の付近まで感潮域であるため日々の水位差が大きく塩分が混じるだけでなく、村人は洪水の頻度や程度もひどくなったと言い、5年前の床上浸水の大洪水を機に、村の北側に広がっていた水田での稲作は放棄され荒地となっている。

NGOの支援活動について

この村では FNPF 以外の NGO を含めさ まざまな環境保全や村落開発プロジェクト が導入されている。ゴミ処理システムのプロ ジェクトの標識を見たが、家の周りには容器 や包装ごみが散乱していたし、NGO が支援 してできた学習小屋の活用状況も見ること ができなかった。村内中心部の道路は洒落た ブロックが敷かれているが,道の中央に穴が あったり,崩れた箇所が修理されないままに なっていた。観光客を意識してか、大通りの 脇に花壇や街灯も設置されているが,村の景 観とのミスマッチを感じざるを得なかった。 白人観光客がガイドに案内されて村内を歩 く姿をしばしば見かけたが,何軒かの家の前 に並べられているウリンの木彫りオランウ ータンの販売収入は、持続的な生計補助手段 となり得るのであろうか。森を守ることが生 計確立に結びつくための多面的かつ系統的 な戦略を考える必要があろう。

地元の問題を例に課題解決を考えさせる 環境教育が行なわれていることを垣間見た が,子どもたちが成長して地元に留まり自然 保護の担い手として活躍してくれるまで,国 立公園周辺の森は残っているであろうか。こ の村が名前の通りに希望の村となるには,プ ランテーション開発を機に生じた村人間の 亀裂を修復する粘り強い支援活動が必要と 感じられた。

第22回ワンワールドフェステバル出展報告

春日直樹

ワンワールドフェステバルが 2015 年 2 月 7 日 8 日両日にわたって大阪市北区で開催され、ウータンも参加した。会場は扇町公園・関テレ・北区区民ホール。昨年の国際交流セン

ターより参加団体や来訪者が多く、両日とも盛 況であった。国際交流や海外の生活支援、医療 支援などの団体が出展。飲食店やトークセッションで、民族衣装の人も多く会場を訪れた。華 やかな雰囲気を醸し出していた。

北区民センター大ホールが会場、ウータ ンの展示場所の隣は、ボルネオ保全トラス トジャパンであった。共有する活動内容や 顔見知りも多く、和やかな雰囲気で情報交 換が出来た。展示を中心にインドネシア・ カリマンタンの森の減少に伴って生物多様 性が損なわれている。アブラヤシ開発や齎 す自然環境改変を写真とスライドで紹介した。 ウータンの会報、冊子で活動を紹介し、会員 獲得へ向け PR もした。インドネシアに関心 を持ち質問する人もいた。上野動物園でオラ ンウータンと過ごした黒鳥先生の講演と懇親 会があった。ウータンのメンバーも参加した。 ウータンの会員や生物多様性で繋がる知人と 旧交を暖める事が出来た。ウータンの勉強会 で黒鳥先生のお話を聞きたい。







写真はウータンの展示と会場風景

世界の森林ニュース World's Forest News

【11月米国、中国、温暖化対策へ動くが、日本は?】

地球温暖化の対応へ米国、中国は共同行動の声明を発表。今まで後ろ向きの2国で 11月12日、危機に対処するため協力と。オバマ大統領は1月に新政策表明。だが日本は3.8%削減のみ(各紙、国連)

【木材消費国5カ国の違法材取引の調査報告発表】

英国シンクタンクのチャタムハウスが「違法伐採と 関連取引の指標」とフランス、日本、オランダ、イギリス、アメリカの違法木材取引の報告を発表。5ヵ国で 政府等も違法木材について対策を行って過去10年 で違法木材輸入減少と。だが報告書で日本は12% の違法材輸入で、1番取組が遅れ日本語版も発表。 (資料: Chatham Housel1.26、illegal loggingで)

【ベルギー政府、EU 木材法違法の木材押収】

グリーンピース調査でベルギー当局が木材を押収。当局はアントワープに到着したブラジルからコンテナ木材のイペ材が違法に伐採され、EU木材法を犯したことに対応。(資料/11.16Mongabay&GP)

【ミヤンマーで 155 人の中国人、違法伐採で逮捕】

155 人の中国人が違法伐採のためにミャンマーで 逮捕とフランス通信社が報じる。2015 年 1 月 27 日)

【科学者、ペルー等アマゾンのカカオ開発問題と】

有名な科学者グループは、ペルー・アマゾンでカカオ会社が伐採で警告鳴らす。米国企業が2000ha 既に破壊。「google+ hutan.nishioka@gmail.com blog」

【ブラジル、森林破壊策で削減も 400の Dam 計画】

2006年から森林破壊を拡大した大豆作をモラトリア



ムし、破壊は 1/100 に減少。 モラトリアムの成果だ。 森林転換のモラトリアムで、 アマゾンでの森林伐採を 劇的に減らし、非常に効

(図; 大豆と森林減少) 果的と。だがブラジル政府は2030年までに400箇所のダムを建設する計画で、1月インディオが抗議。(サイエンス誌 1/23,西岡 Blog)

- 11 月~2015 年 2 月

【2015年1月から森林破壊 Zero 行動が動き出す】

By Nishioka

1月 Dan 氏の呼びかけで Zero Deforestation 行動が動き出す。西岡や Telapak・Yayat 氏も呼びかけ2月11日参加百人こえ、パラグアイ政府は2018年に Zero Deforestation 政策を目指すと表明。 資料 (domtarblueline.com/wp.=3 Things to Know About

資料 (domtarblueline.com/wp.=<u>3 Things to Know About</u> Anti-Deforestation Pledges か hutan.nishioka@gmail.com)で

【森林破壊に加担する500社の政策転換を】

Global Canopy は2月森林破壊を拡大する500 社の政策転換をと。2月11日 UNEPのHPアップ(呼 びかけ)で、<u>hutan.nishioka@gmail.com</u>ブログでも やっと同日 Up。日本企業は花王、王子製紙、住林 Group やサラワクのサムリン社、WTK 社等が含まれ 破壊の上位にアブラヤシ企業が占める。(UNEP)

【サラワク州新首相、木材業界に汚職蔓延と発言】

マレーシア・サラワク州の新首相アデナン氏は木 材伐採業界に汚職蔓延と認める発言をした。同氏は、 木材産業幹部会合で大手企業6社は誓約書を提出 すべきと。6社は、KTS、リンブナンヒジョウ社、サムリ ン社、シンヤン社、タアン社、WTK。規制の怠慢で、 腐敗でサラワク州は収入を失い、国際的に悪評判を 得たと。またカレントバイオロジージャーナルはこの ままでは破壊で2080年に動物相の1/3が絶滅と。 (11/24Mongabay/BMF/カレント・バイオロジ1/22)

【無法な伐採・インドネシアで続き、新大統領動く】

インドネシア新大統領ジョコウィドドは、アブラヤシのプランテーションのために泥炭地を変換した企業のためのライセンスを確認するために環境森林省に命じた。また同国汚職撲滅委員会は前ハッサン林業相が公有地でのアブラヤシ拡張容認で賄賂かと指摘。ForestWatch Indonesia は森林破壊の約半分が伐採権取得地外で行われたと。Thanks!Bob(Jakarta Post11・30/Guardian 誌 11・27&フォレストウオッチ)

【Wilmar、IKEAが Zero Deforestation 宣言?】 1月21日等、世界最大パーム会社 Wilmar や家具 IKEA はサプライチェーンの森林破壊排除を発表。



井下祥子

<会費・カンパをあいがとうございます!>

2014.5.22~2015.2.24

☆振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。

領収書がご入用の方は、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。



~おたよりから~

御声援、ありがとうございます!

*少しですが切手代の足しにでもお使いください。頑張ってください。応援しています。

福永一美

*ウータン協力者の樫田秀樹氏が『悪夢のリニア新幹線』(旬報社)を出版した。 JR 東海の「リニア中央新幹線」は奈落を500キロで走行。新幹線の3倍(原発1基分) の電力を消費、JR東海は「採算が取れない」と公表している。南アルプスに20*nの トンネルを掘削、大規模な環境破壊だが、国民的論議もない。(『世界』2015年2月号に も対談を掲載)

> 樫田さんを招いて勉強会を4月25日(土)14:00~16:30 に行う 会場は大阪の弁天町 ORC200 生涯学習センターの講堂

(4月 18日までに日本熊森協会に申し込みが必要TEL:0798-22-4190, FAX:0798-22-4196Email:contact@kumamori.org資料代が必要です。)090-5640-0396春日直樹

☆年会費1万円以上という活動団体もかなりある中、ウータンは極力値上げせず、 1ヶ月にして、340円弱のご支援でがんばっております。

今後も「結果を出す」べく、さまざまな活動を行いますので、 どうかよろしくお願いいたします。

わたしら、生き残れるやうか? みんな応援してね~



ウータン学習会 「見えない油 パーム油」って何 専門家に聞く会

講師:中西宣夫さん(ボルネオ保全トラスト・ジャパン 理事)

日時:4月18日(土)15時~17時

(終了後、同会場で懇親会予定)

場所:ケイゾク・エナジー 大阪市北区鶴野町4 コープ野 村梅田 A 棟 1310 号室

(阪急梅田駅茶屋町口から徒歩7分)

加工品として生活に浸透する「見えない油」とも言われるパーム油。ボルネオの熱帯林破壊に深く関わるパーム油のアブラヤシプランテーションですが、実際にどうやって作っているかなどなどよく知りません。もっとより深く知るための勉強会を行います。



地図中央上のAのところがコープ野村梅田

講師紹介:中西宣夫 さん

(NPO 法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン理事)

バックパッカーで世界中を放浪後、ヨルダンでのパーマカルチャーに携わるなど様々な 経験を持ち、ディープな大阪をルーツに持つおもろいおっちゃんです。ざっくばらんに 語り合う場にしましょう。

問い合わせは、石崎 (issy@pure.ocn.ne.jp 090-8145-1146) まで



ウータン・森と生活を考える会

[OFFICE] 〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308

> 「関西市民連合」気付 Tel.06-6372-1561

http://www.hutang.jimdo.com

[一部]300円 [年会費]4000円 [郵便振替]00930-4-3880

- ◉購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
- ●ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。

PRINTED ON RECYCLED PAPER